みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

中国の「国境文化」の人類学的研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚田, 誠之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5668

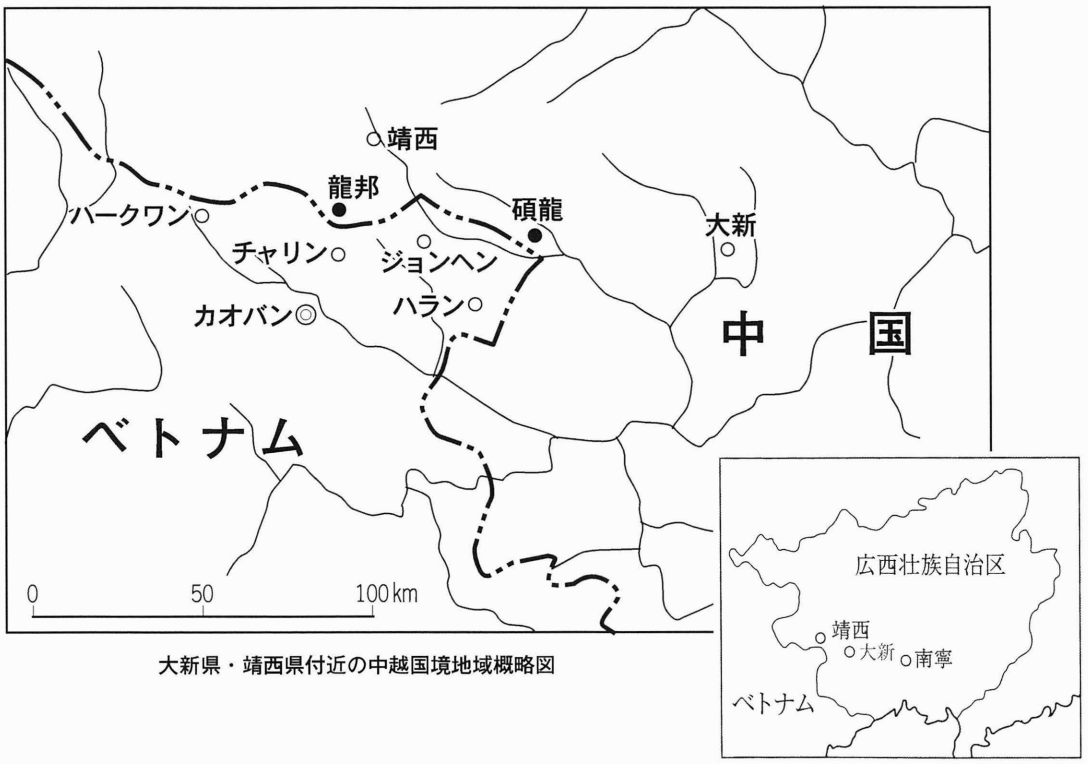
もう一つの親族、“ラオトン”

チワン（壮）族とベトナム民族とのネットワークの一側面

塚田誠之（国立民族学博物館）

1. はじめに

筆者は、これまで中国のチワン（壮）族とベトナムのヌン族を取り上げて、文化の比較、相互の交流の実態について検討を行ってきた。交流について、国境貿易、民間の文化活動、親戚・友人、通婚、ベトナム人の中国への出稼ぎ、国境の越え方、相互のイメージなどを取り上げた。その中で擬制的親族として、男女ともにほぼ同じ年齢の同性の相手と「ラオトン」〈老同。「トンニエン」（同年）とも呼ぶ。現地語も同じ〉関係を結ぶことを指摘し、若干の事例を提示するとともに国境地域の場合、不安定な立場に置かれた人々が安定や精神的な拠り所を求めて、こうしたネットワークによる結びつきをより必要としたゆえにとくに濃密な関係になるよう指摘した［塚田 2010a］。ただしラオトンについては先行研究が殆どなく[1]、立ち入った検討は将来の課題とせざるを得なかった。その後、実地調査を通じてラオトンに関する新たな事例を少なからず得た。またベトナムのタイー族のラオトンの事例も得られた。本稿では、新たな事例にもとづいて、壮族とヌン族・タイー族の間のラオトン関係の実態について、その契機、儀礼、結婚と葬式の際の往来、家の新築祝い、道士の儀礼、相互扶助、呼称、重要性、目的などについて検討し、ラオトン関係の全貌の解明に近づきたい[2]。



大新県・靖西県付近の中越国境地域概略図

2. 契機

本章ではラオトン関係を結ぶ契機について検討する。契機は二つの類型に大別することが可能である。すなわち、1. 互いに性格が合うなど個人的な関係が良好なゆえ自ら主体的に決めた、2. 第三者、すなわち他人の紹介を経たり、親が先方の親と子供同士をラオトンと決めたことが挙げられる。1 の場合、さまざまな状況が見られる。これについて次の事例がある。

【事例 1】大新県碩龍鎮 S 村方 Z 氏（68 歳、男、2010 年調査）

氏には 2 人のベトナム人のラオトンがいる。1951 年から 58 年まで、碩龍中心小学で一緒に学んだ。ラオトンはベイ・ウアン・N 氏とホアン・ヘン・G 氏で、N 氏は氏より 2 歳年上、G 氏は同じ年だった。N 氏は現ハラン県リーコック社 L1 村、G 氏は L1 村に隣接する L2 村の出身である（ともにタイー族）。3 人の住む村は碩龍街のすぐ近くである。当時、N 氏によると L1 村から 4 人が、G 氏によると L2 村から 7 人が碩龍中心小学に通学した。ベトナム側には小学校がまだなかった。当時は男子のみが学校に通った。当時の小学校は 8 年制（初等 4 年・高等 4 年）で、方 Z 氏の記憶では初等クラスの 1 年から 3 年まで N 氏・G 氏と同級生だった。1 学年 2 クラスのみで、1 クラスには 36 名の生徒がいたが、ベトナム人は 6 人のみだったという。学校ではラオトンと一緒に学び、夏休みには一緒に魚取り、釣りをして遊んだ。当時は中国に人民服がまだ無く、衣服は同じだった。また土話（壮語）、白話（広東語）で話をしたという。

【事例 2】靖西県龍邦鎮 J 村農 G 氏（40 歳、男、2010 年調査）

氏はベトナムのチャリン県にラオトンがいる。彼の幼名は「以打」といい、氏より 3 日早く生まれた。3 人の子供がおり、1 男 2 女と氏と同じ家族構成である。氏は以打が 7、8 年前に龍邦鎮へテレビを買いに来たときに、氏の母方イトコとともに、天秤棒でテレビを 3 人で交替しながら担いで 6、7km 離れた以打の家まで運んだ。以打の家に着いてから、一緒に食事をして意気投合し、以打が申し出てラオトンになった。

【事例 3】大新県碩龍鎮 A 村梁 E 氏（50 歳、男、2012 年調査）

氏にはラオトン 2、3 人がグイソン（帰春）河をはさんで対岸のハラン県ミンロン社にいる。うち「阿礼」が最も親密で、氏と同年だ。1986、87 年頃、ベトナムでまな板用木材を仕入れる商売で知り合った。木材は阿礼が山で伐採したものを、氏が仕入れて竹筏で A 村に運搬した。氏はこの商売を 2、3 年した。あるときには数十本、ときには十数本運び、外地から来た商人に売った。

事例 1 は少年以来の付き合いで、同じ小学校に通い親しくなってラオトンになったものである。事例 2 は幇助、事例 3 は商売が契機になっている。それらは自らの意思でラオトンになっているが、第三者が決める事例も少なくない。これについて次の事例がある。

【事例 4】靖西県龍邦鎮 Q 村農 C 氏〈67 歳（2011 年）、男、2011 年・2012 年調査〉

氏には 6 人のラオトンがいる。年齢は同じくらいで、チャリン県に 2 人、ハークワン県、ジョンヘン県、クワンホア県にそれぞれ 1 人いる。ラオトンの中でチャリン県の譚 L 氏（農 C 氏より 2、3 歳上）が最も親しい。譚 L 氏は兵隊になって戦って左手を失った。双方の父が友人で、氏が 26 歳のとき、彼らの子同士をラオトンにすることを決めた。したがって譚 L 氏とは 1960 年代に知り合った。譚 L 氏は農民だが、その姉の夫はチャリン県で政治的要職にある。この他、クアンホア県のラオトンは、父のラオトンの甥で、父のラオトンが紹介した。ハークワン県のラオトンも父のラオトンが紹介したもので、県の要職にあって、チャリン県のラオトンともども氏の商売に協力した。氏は 1960 年代以降、ベトナム特産の「鉄木」を仕入れて売る商売をしていた。ジョンヘン県のラオトンは、父が先方の父親と友人だっ

たので、父の勧めでラオトンになった。

氏はベトナムとの国境貿易に関わってきており、商売の仔細については多くは語らないが、少なくともチャリン県のラオトン譚L氏の場合、双方の親が親しく、その紹介でラオトンになっている。氏の弟農M氏（59歳、男、2011年調査）も一時期、マンガン鉱石の輸入の商売をしていたが、チャリン県での鉱石集めに農M氏自身のラオトンが協力している。農M氏のラオトンも兄同様、父が薦めたものである。これらは、ラオトンになった契機は親の紹介だが、その後、この関係を活用して商売をした事例である。

このようにさまざまな状況が見られるが、総じて「ベトナム人はラオトン関係を結ぶのを好む」（靖西県龍邦鎮黄X氏、59歳、男、2012年調査）と言われており、先の事例2でもベトナム側がラオトンになることを提案している。ラオトンになる年齢については、先の事例2は当事者が30歳を越えて子供を持ってからであるが、総じて若い未婚の時代になる場合が多いようである。事例4の農C氏の場合も6人のラオトンの多くは婚前になったものである。双方の年齢は、例外があるものの、上記の4事例からすると同じくらいの場合が多い[(3)]。

3. 儀礼

本章では、ラオトンになる際の儀礼について検討する。中国側での調査では儀礼が行われたという情報は少ない[(4)]。先の事例4の農C氏は、中越戦争（1979年）前に、父のラオトンの紹介によってハークワン県にラオトンを持っていたが、そのラオトンは県の政治的有力者で、氏の商売の手助けをしていた。農C氏は相手宅の神棚の前でニワトリを殺して祖先を拝み、後、ラオトン同士が跪拝したという。ベトナム側では儀礼が行われたという情報が中国側より多い。次に挙げるのはその事例である。

【事例5】ジョンヘン県ンゴック・コック社P村リン・ウアン・C氏（50歳、タイー族、男、2012年調査）

氏には10人のラオトンがいるが、うち中国にも3、4人いる。10～12歳頃、父親が用意したモチ2対（4個、豆・ブタ肉餡）、ニワトリ1羽、酒1本を先方と贈答し合った。それらの供物を先方の祖先祭祀棚にそなえてラオトンと一緒に拝んだ。その際に先方の家族全員が傍に立った。中国のラオトンとは、1970年代に一緒に放牛をして仲良くなり、ラオトンになったものである。なお、今は放牛をしていない。ベトナム国内にもラオトンがいるが、5、6歳頃に親が決めたものである。ラオトンになる時、上記の供物の他に碗・箸を贈答し合った。碗・箸を交換する行為は、子供たちが元気に育つように願う意図があるという。

【事例6】ジョンヘン県ンゴック・コック社ホワン・ハイ・S氏（42歳、タイー族、男、2012年調査）

ラオトンになる際、道士に日を選んでもらい「ニン（認）儀礼」をした。大きなモチ（豆餡）10個、調理したニワトリ1羽、砂糖1袋、酒1本を神棚に備えて、線香をあげた。その後2人は手を合わせて祖先を拝んだ。道士は来ず、両親のみが立ち会った。2人で親を拝んだ。儀礼が終わった後、一緒に供物を食べた。双方で期日をたがえて同じ儀礼をした。ベトナムの国内のラオトンとも同じことをした。

事例5・6ともに儀礼の場に道士は来ない（6の場合、道士が吉日を選んでいる）。立会人として家族全員（事例5）、両親のみ（事例6）の違いがあり、また事例6で明記されているように、双方で期日をたがえて同じ儀礼をする。儀礼の名称は「ニン儀礼」という（事例6）。さらにベトナム側の国内のラオトンの事例では、モチを作って互いに持ち寄って食べるという場合もある〈ジョンヘン県ダムト

イ社 B 村ノン・フック・L 氏（76 歳、タイー族、2012 年調査）〉。この儀礼はヌン族のもとでも以前にあったという）。先の事例 1 では、とくに親の同意は得なかったというが、事例 5、6 の場合、親が儀礼に立ち会っており、同意を与えている。

4. 結婚式の際の往来

ラオトン自身およびその子女の婚礼への出席は葬式と並んで重視されている。先の事例 2 の農 G 氏のラオトンは「年中行事には来ないが紅白事（結婚式と葬式）には来る」ので、農 G 氏は事前に他の人に頼んで先方へ知らせるという。婚礼の事例として次のものが挙げられる。

【事例 7】靖西県龍邦鎮 Q 村農 C 氏（2011 年調査）

1970 年代に、ラオトンである譚 L 氏の妹が結婚した際に本村の友人たちと数人で行った。氏はフトン 2 組を持参した（現在の価値で 2、300 元に相当）。他に祝儀は贈らなかった。1 晩泊り、翌日昼飯を食べて戻った。戻る時、返礼としてブタの脚（未調理）、オコワ 1kg を贈られた。友人たちは何も贈られなかった。宴席の際には神棚の前の主卓に坐り、先方の家族の女人がひざまづいて酒を勧めた。

1993 年に氏の長男が結婚した。この際にラオトンは 100 千ドン（人民元 50 元に相当）を贈った。一緒に参加したベトナムの友人（チャリン県の社の幹部）は何も贈らなかった。氏はラオトンに返礼としてブタの脚とオコワ 1 包を贈り、国境まで送った。

氏は 3 人の子女がいるが、ラオトンは次男、および末子（女児）の結婚には来なかった。というのは、次男は現在大学教員をしているが、その婚礼は靖西県城で行った。県城にベトナム人を招聘するのは手続きが煩瑣なためである。末子は、小さいときには氏がよく連れてラオトンのところに行った。現在、教師をしているが、その婿は国家公務員ゆえ婚礼にラオトンを招待しなかった。ラオトンの譚 L 氏にも 3 人の子女（2 女 1 男）がいるが、農 C 氏は長く村の行政職をしていたので会議が多く、譚 L 氏の子女の結婚式に行くことができなかった。

【事例 8】大新県碩龍鎮 D 村方 Y 氏（50 歳、男、2011 年調査）

方 Y 氏にはラオトンとして、グイソン河の対岸のハラン県ミンバン社 B 村にノン・ウエン・Y（52 歳、タイー族）がいる。先方とは 1980 年、中越間の戦闘の終結直後に、国境貿易で知り合った。当時、氏は中国製のフトンを売り、ベトナムから漢方薬や民間の薬材を仕入れて売った。婚礼や葬式には互いに呼びあった。婚礼について、まず、ベトナムのラオトンの長女が 2001 年に結婚したときに夫婦で筏で河を渡り参加し、フトン 1 組（当時 70 元）を贈った。帰りに未調理のブタの脚を贈られた。次いで、2003 年、ラオトンの長男が結婚したときも夫婦で行った。この時は酒（焼酎）10 斤（5ℓ。1 斤 500g）、米 10 斤、祝儀 20 元を贈った。この時、先方からは何も返礼に贈られなかった。さらに、2005 年、先方の次女が結婚した時にも行き、祝儀 30 元を贈った。先方からは何も贈られなかった。2009 年、4 番目の子供（男児）が結婚した時にも夫婦で行った。祝儀 100 元を贈り、返礼にブタの脚を贈られた。

ラオトンの家での宴会について、長女の結婚のときにはニワトリ・アヒルは出されず、調理したブタ肉のみだった。2005 年以降、ニワトリ、アヒルが出されるようになり、さらに中国での宴会の影響から扣肉（ブタ肉を碗に詰めて蒸したもの）など中国式の料理を設けるようになったという。

なお、氏には 2 人の子供がいるが、長男は広東へ出稼ぎに行き、2005 年、そこで知り合った湖南省の女性と結婚しており披露宴を催していない。長女は 2008 年に結婚したが、当時一家で広東へ出稼ぎに行った上、長女は結婚に際して父母の同意を得なかったので披露宴を催していない。

氏はラオトンの子供の満月の祝いにも行った。ラオトンの女児は遠方へ嫁いだので、長男の子供の

出生祝いである。このような場合、以前は米と祝儀を贈ったが、2005年以降は祝儀のみを送るようになった。

【事例9】大新県碩龍鎮S村方Z氏（2010年調査）

ラオトンとは今も婚礼や葬式に互いに招きあう。1994年、長男が結婚したときラオトンのベイ・ウアン・N氏とホアン・ヘン・G氏がそれぞれ1人で来た。人を代理で派遣して「請帖」（招待状）を渡した。祝儀はそれぞれ人民元5元、10元だった。2003年、G氏の三男が結婚したとき請帖（ベトナム語。人に翻訳してもらった）をもらったので、1人で祝いに行った。日帰りで、祝儀50元を贈った。今年3月にN氏の四男が結婚したときも1人で行った。やはり日帰りで、祝儀100元を贈った。

氏自身は1965年に結婚したが、N氏・G氏ともベトナムで兵隊になったため婚礼に来ることができなかった。その後もそれぞれ兵士や県（当時ジョンヘン県。1982年にハラン県が出来た）の役人となって往来することが少なかった。中越戦争の際には碩龍に部隊が駐留したため、往来がなかった。中越両国の正式な和平（1990年）以降、とくに1992、93年以降往来するようになった。

ちなみに、1966年にN氏自身の結婚の際に方Z氏は呼ばれて行き、他の2人のラオトンと共同で鏡を贈った。

事例9の場合、事前に招待状を託して送っているが、多くの場合、なんらかの方法で事前に先方に通知をしている（最近では直接、携帯電話で連絡する場合も少なくない）。事例7・8の場合、女児の結婚に際してフトンを贈っている。これは通常相手の家族が用意するもので、それだけでもラオトンの重要さが窺われる。また贈答用品としてブタの脚が見えるが、これはとりわけ重要な者に贈られるものであり、やはりラオトンの重要さが垣間見える[5]。事例7ではラオトンは神棚の前の主卓に座っている。事例9の方Z氏のラオトンN氏の結婚の際に、参加したラオトンたちは饗応に預かるのみで、調理や給仕などの宴会の手伝いは村人がしたという（N氏による）。事例8で方Y氏は、先方の長男の結婚の時には酒・米などを贈っているが、4番目の子の時には祝儀のみである（金額は経済状況による）。以前は伝統にそって酒・モチ米を贈ったが、現在は現金を贈るという時代の変化が見て取れる[6]。また、夫婦で行くという点にも、距離の近さもあるが、家族ぐるみの付き合いであることが見てとれる。事例8には宴会を催すベトナム側の経済状況の向上が窺われる。この点は中国との経済格差やベトナムでも個人の家庭の経済状況の差異があるようで、事例9のベトナム側の祝儀は中国や同時代のベトナムの別の事例（事例7）に比べて格段に少ない[7]。事例9は、子供の時にラオトンになった（事例1）ものの、小学校を出て、長じてからは仕事や戦争のため往来が少なく、中越戦争終結後に互いに頻繁に往来するようになったものである。事例7では、自分や子供あるいはその配偶者の職業の都合や宴会の地点によっては、ラオトンといえども行くことができなかった。事例7には、広西で1990年代中期以降盛んになり現在も続いている広東への出稼ぎや、親の同意を得ない結婚という現代的な側面が見て取れる[8]。そこにはラオトンといえども仕事などの個人の事情や外的状況に左右されがちな点が窺われる[9]。

なお、壮族・タイー族・ヌン族は結婚し子が生まれて1カ月経った「満月」の祝いを盛大にする。たとえばジョンヘン県ダムトイ社L村（ヌン族）では、最初の子が生まれたら盛大に祝う。ブタ1、2頭をさばき、100人くらいも参加するという。先の事例8にも、ラオトンが満月に祝いに来る習慣が見られる。大新県碩龍鎮A村梁H氏（74歳、男、2012年調査）によると、祝儀の他に子供の衣服一式を祝いの品として贈るという。

5. 葬式の際の往来

結婚式と並んで重要なのが葬式である。葬式については次の事例がある。

【事例 10】靖西県龍邦鎮 Q 村農 C 氏（2011 年調査）

1992 年、最も親しいラオトン譚 L 氏の父の死に際して村幹部 2 人を連れて行った。氏は村の幹部であったが、ラオトンの父の葬式への出席は氏にとって不可欠だった。香典 100 元（別の 2 人は 30 元）、米（生のモチ米 20 斤、米 20 斤）、子ブタ一頭（80 斤、当時 200 元に相当した）を殺したものを持参した。葬式は 3 日 3 晩続いたが、氏は 2 晩泊った。子ブタはラオトンの側で半分に切って、残り半分を返礼にもらった（縦に半分に切る。頭部も半分に切る）。

棺を担ぐのは別の人で、服喪中の「帯孝人」は担ぐことができない。出棺の際、氏とラオトンとが棺の前面に並んで歩行した。並び方は、男性（死者の男児およびそのラオトン）は第一列、女性（夫人）や子供・孫は後方である。出棺前に少なくとも 3 回棺に向かって跪拝した。ラオトンは死者の子供としての待遇を受ける。今も Q 村では同様に行う。

その 2 年後、ラオトンの母が死んだ。その時は子供を一人連れて行った。ラオトンの父の葬式の時のように香典 100 元・米・ブタの頭を贈った。礼儀上、男性のほうが重要ゆえ、ブタは頭部のみだった。

1982、83 年の頃に母が死去した。戦争後、和平条約がまだ結ばれていなかったゆえ、ラオトンはひそかに来た。来ないと相手に申し訳ない（「不好意思」）ゆえ来たという。ラオトンは当日に帰った。公安が厳しかったので、礼物を持参できなかった。葬式の間中、ラオトンは白い「孝巾」を被った。

先月、氏の父（100 歳）が死去したときは、両国の関係が良くなかったので、ラオトンは呼ばなかった。

葬式終了後も命日に往来する。譚 L 氏の父の命日には、ブタ肉 5 斤および香典を持参して 1 人で行った。氏の父母の命日にもラオトンを呼んだ。その際に道士が誦経し、オコワを準備した。命日には子供・夫人を連れて行けない決まりがある。また、服喪期間中はラオトンを呼ばないで、服喪明け儀式に呼ぶ。服喪期間は、普通、男性は 3 年と 21 日間、女性は 3 年と 49 日間である。死者が男性なら 21 日間、女性なら 49 日間、白布をかぶる。この期間を過ぎたら白布を焼く。

【事例 11】靖西県龍邦鎮 J 村農 G 氏（2010 年調査）

2007 年、父が死去した際にラオトンを招待した。ラオトンは夫人とともに、ニワトリ 1 羽・酒 10 斤・米 20 斤を持ってきた。夫人は日帰りだったが、ラオトンは埋葬が終わるまで 2 日間過ごした。ラオトンは葬式の手伝いをせず、もっぱら村人が手伝った。

【事例 12】靖西県龍邦鎮黄 X 氏（2012 年調査）

ラオトンの父が 1997 年に死去したときに香典 100 千ドンを持参して行った。3 日宿泊した。葬式の儀礼が 3 日間行われ、3 日目の朝に埋葬したが、出棺のとき死者の子と一緒に前面を歩いた。道士は現地人で、会話のときは土話、誦経は普通語を使用した。使った白布はとっておく。

事例 10・12 によると、出棺の際に死者の子であるラオトンとともに白い布「孝巾」を頭から被り棺の前を歩行して埋葬地へと向かっている[10]。事例 10 によると棺に向かって 3 回跪拝している。服喪中の者ゆえ棺を担ぐことはできない。事例 11 によると、ラオトンは埋葬が終わるまで帰らない。事例 12 によると道士による葬儀の儀礼が 3 日間続いている。さらに事例 10 によると、香典としてモチ米や米、現金のほかにブタ 1 頭を持参し、葬式の終了後に返礼としてそれを縦半分に切ったものを受け取っている[11]。また出棺の際にラオトンとともに最前列に位置し、夫人や子供は後列に位置している。死者が女性の場合、ブタ 1 頭ではなくブタの頭部で、男女の差異がみられる。事例 11 では、葬式の手伝いはしない。このように、ラオトンは事例 10 に明記されているように、死者の子供としての待遇を受けている。なお、事例 10 では服喪期間が示されている。また、ベトナムでは父母の命日に道士を呼び誦経をしてもらう[12]が、その際にラオトンを呼ぶことが示されている。

なお、葬式は婚礼よりも重要で、通知がなくとも行くという言説（ハラン県リーコック社 L1 村ベイ・ウアン・N 氏）があるほどだ。事例 10 では農 C 氏は村幹部の身分であるにかかわらず他の幹部を引き連れて参上している。同人は、ラオトンの子女の結婚に際して、村幹部の仕事のため、必ずしも全

てに参加していない（事例 7）が、葬式だけは特別なのである。農 C 氏の母の死に際しては両国の交戦状態が完全に終わっていないにもかかわらずラオトンが来ている。そうまでしても来ないとならなかったのである。地域によっては、葬式は親戚のみに通知しラオトンには通知しないが、それでも行くという場合も見られる [13]。それはラオトンの父母の死が実の父母の死と同等に見做されていたからである [14]。

6. 家の新築祝い

祝い事の一つとして家の新築祝いが挙げられる。この場合にもラオトンは祝いに行った。その事例を挙げよう。

【事例 13】大新県碩龍鎮 D 村方 Y 氏

2001 年にラオトンが家を新築したときに、80㎡もの天井部分に使う木板を含めて 100 ～ 200 枚の木板を贈った。その際に 800 元を相手に貸して、相手はそれでセメント、鉄筋などの建材を購入した。その金は 5 年ほど後に返却してもらった。新築祝いの宴会には、1 人で酒 10 斤・米 10 斤を持参して行った。1 晩宿泊し、昼食、夕食、翌日の昼食と 3 回食べて帰った。2006 年以降、近辺の地での新築祝いの宴会が簡略化されて昼食のみになった。

方 Y 氏のラオトンとの結婚式における往来は事例 8 で紹介した通りで、そこから両者の親密さが窺われる。上記の事例にある重要な木を含む木材の提供は他に事例がないが、それだけラオトンが重視されていたことを物語っている。この場合、建材を購入する資金の貸借をも行っている。家の新築祝いへの参加について、靖西県龍邦鎮 Q 村の農 C 氏も、2000 年に自宅を新築した際に、ラオトン譚 L 氏は夫妻で、男児を連れて、モチ米 20 斤・米 10 斤・酒 10 斤・去勢した大きなニワトリ 1 対を持参して来ている [15]。

7. 長寿祝い

長寿祝いは、祝い事の一つとして、ベトナム側で「福（49 歳）・寿（61 歳）・康（73 歳）・寧（85 歳）」、とくに寿・康・寧が当事者の誕生日に盛大に行われる。次はその事例である。

【事例 14】靖西県龍邦鎮 Q 村農 C 氏（2011 年調査）

氏はラオトン譚 L 氏の父の 61 歳の誕生日に行った。その場合、供物を先に自宅の神棚に捧げてから持って行った。礼物は、時計が付き「寿」字が形どられた鏡（その上に小さく贈り主の氏の名前、贈った年月日を書いた）、酒 10 斤、ブタ肉少なくとも 2kg、果物、菓子、祝儀 20 元であった。布匹は贈らなかった。

氏は譚 L 氏の父の 73 歳の誕生日にも行った。弟と 4 人の友人（村幹部）とで礼物の焼きブタ 1 頭などを担いで行った。焼きブタは 73 歳以上の祝いの時のみに贈る礼物で、通常、当事者の子供や娘婿といったごく近しい家族が贈るもので、そのことは民族の習慣である [16]。贈るブタには大きさの規定がある。その大きさはラオトンの子供が事前に通知する。仮に「自分が贈る焼きブタは 80 斤」と通知されたら、客人はこの大きさを越えるブタを贈ることはできない決まりがある。ラオトンの姉の夫が県の役人だったので、焼きブタはベトナムの公安にオートバイで運んでもらった。他に 1 個あたり 5 斤のモチ米を使った大きなモチ 4 個、果物、菓子、鏡（上に氏の名を書いた）、祝儀を送った。73 歳の誕生日には「寿」字を染めた紅色の布が贈られるが、それはベトナム側の親戚が贈った。

ラオトンの家では礼物の並べ方にも決まりがあった。すなわち、神棚のすぐ前に誕生日を迎える当事者が座る。そして、その後方に3列のテーブルが置かれるが、第一列に当事者の男児（譚L氏）の贈った焼きブタを中心に、ラオトンである氏の贈った供物はその横に置かれた。第二列には、当事者の女児や婿の贈った焼きブタ、供物が置かれた。第三列に、普通の親戚の贈ったブタの頭部、去勢したニワトリなどが置かれた。

供物のすぐ後方に道士が座り、さらにその後方に参加者たちが座るが、その座り方も供物の置き方と同じで、第一列は当事者の男児である譚L氏、譚L氏の弟や伯父、そしてラオトン（氏）、第二列は当事者の女児、譚L氏の女婿、夫人や伯父の夫人、さらに譚L氏のラオトンの姉妹たち、第三列に普通の親戚、一緒に行った氏の弟が座った。他の朋友たちはさらにその後方に座った。このとき氏の子供は時間がなく行かなかった。氏の女児がいけば第三列に座ることになっていた。

かくして譚L氏の父の73歳の誕生日のときには、息子の譚L氏、2人の女児、そして譚L氏のラオトンである氏がそれぞれ用意した4つの焼きブタが並んだ。5人の道士を呼び、太鼓・シンバル・ドラの演奏の下、誦経が行われ、儀礼は朝から翌日昼まで続いた。食事の際には、譚L氏と氏は主卓に座り、他の者は傍の位置に座った。その規模は61歳の時よりもはるかに盛大だったという。

なお、49歳、61歳の誕生日にも道士を呼ぶが盛大ではない。85歳の誕生日は73歳のときよりもさらに盛大だが、現実にはそれまで生きる人は少ない。

【事例15】靖西県龍邦鎮J村農G氏（2010年調査）

去年、岳父の61歳の祝いに行った。妻はベトナムのチャリン県チーフォン社L村から嫁いで来た。殺したブタ1頭（赤い紙を貼る。60斤。未調理）、モチ2皿、酒20斤、米20斤、「寿」字を染めた布を持参して一家で行った。2人が豚を担ぎ1人は米・酒を持った。祝儀は不要である。チャリン県の別の村にいるラオトンの父の長寿祝いの際にも同様にした。ラオトンの父が73歳の際に通知があれば同じようにブタを持って行く。「通知はもちろんある」。

【事例16】ジョンヘン県ンゴック・コック社ホワン・ハイ・S氏

父が85歳の祝いをした。その際に、道士、巫師「プット」を呼んだ。氏の中国のラオトンで現在道士をしているG氏も来たが、父の「子供になった」ので道士役は務められなかった。G氏は「寿」字を染めた布、モチ5個、大きなニワトリ1羽、酒5ℓ、果物、菓子を持参した。布を贈るのは自分の子とラオトンのみで、他の者は別のモノを贈る。G氏の父の70歳の祝いのときに妹が同じものを持参して行った。

事例14からは、ラオトンが当事者の実の息子と同じ待遇を受けていることが明らかである。ただし長寿祝いのやりかたは地域によって異なる。事例15の場合は、礼物のブタは丸ごとであるが未調理である。岳父の誕生日なので布を持参している。事例16の場合は布を贈るのは自分の子とラオトンのみであるが、その理由、ラオトンは長寿祝いを受ける老人の「子供になった」からである。

これら3例のほか、布や鏡を贈る場合、ブタを贈るのは親戚だけでラオトンや友人は祝儀を贈る場合（ハラン県リーコック社L1村）がある（注16参照）。しかし、長寿祝いはいずれもベトナム側で行われており、中国側では現在のところ靖西県龍邦鎮D村など数少ない地域での事例があるのみ[17]で、多くは事例16のように長寿祝いの年齢が異なり[18]、さらにベトナム側ほど盛大ではない[19]。

8. 道士による儀礼

道士による儀礼は、子供の平安健康を願う「安花」儀礼から厄除け儀礼までさまざまである。その事例を挙げよう。

【事例 17】靖西県龍邦鎮 Q 村農 C 氏（2012 年調査）

災難に遭うと道士を呼ぶ。その際、ラオトン夫妻を招待する習慣である。妊娠 7 カ月に道士を呼んで安花儀礼をするが、このときにもラオトン夫妻を招待する。氏はこれらの儀礼をしたことがないが、村で他人がしたことがある。この際にはラオトンは来るがその子は来ない。ラオトンが来られない場合、その子は代理で来ることができない。災難のときはラオトンが未婚でも来ることができる。

【事例 18】靖西県龍邦鎮黄 X 氏（2012 年調査）

1992 年頃、父方叔母と一緒に商売をしようとしたが、他人に 10 数万元を持ち逃げされ、叔母が訴訟を起こした。このとき、ベトナムの道士 2 人を呼んで厄除けをしてもらった。道士の念経は普通語で、儀礼をした後、一緒に食事をした。ラオトンを招待した。ラオトンは 1 人で来た。龍邦の人が法事をするときは中国人の道士を呼ぶことが多い。

事例 17 は厄除け儀礼や、生まれてくる子供の無事平安を願う「安花」儀礼にラオトン夫婦を招待する場合、事例 18 は家族に起きた災難に対する厄除け儀礼である [20]。儀礼の規模が小さい場合、ラオトンを呼ばないこともある [21]。

9. 年中行事などの往来

ラオトンは年中行事、定期市の機会に、さらに日常的にも往来した。年中行事の際の往来の事例を挙げよう。

【事例 19】ジョンヘン県ンゴック・コック社ホワン・ハイ・S 氏

氏のラオトンは行事の際に 1 人で供物を持って来て祖先を拝んだ。自分の祖先になったためである。1 月 1 日～ 3 日の間に、ブタの脚（未調理）、バインチュン（四方形のモチ）4 個、落雁 4、5 個を、7 月 14 日か 15 日に、チマキ 5 対（10 個）、アヒルのロースト（烤鴨）1 羽、酒 1 本を持参して来た。ラオトンが来ることができない場合、その息子が来たが、同じものを持って来た。

【事例 20】靖西県龍邦鎮 Q 村農 C 氏（2012 年調査）

春節にはラオトンと「拝年」（年賀）に往来し合った。10 年前には 1 月 2 日か 1 月 3 日に往来したが、臘肉（ブタ肉を塩漬けにしていぶしたもの）2 塊、チマキ 4 個、酒 2 瓶を持参した。ベトナムからラオトンが来るときには、これらの他に落雁を持ってきた。氏は毎人 10 元の祝儀袋を子供に与えた。ラオトンが孫を連れて来たことがある。時には 1 人で来た。婚礼や葬式の時と異なり、拝年には夫人は同行しない。農村では旧暦 3 月 3 日に墓参をするが、ラオトンは墓参に参加しない。「7 月半」は、7 月 14 日の前にラオトンの家に行った。アヒル 4 羽を返礼に贈ってくれた。氏が向こうに行く時には、ラオトンがオートバイでチャリン県まで送ってくれた。そこから歩行して帰宅した。

【事例 21】大新県碩龍鎮 A 村梁 Z 氏（70 歳、男、2012 年調査）

ラオトンが旧暦 3 月 14 日にここに来て泊まり、3 月 15 日に碩龍街の「歌墟」に山歌を歌うため行った。付近の村で山歌を歌うことができる人々も大勢来た。ラオトンはその後、歌墟のつど、毎年来た。3 月 14 日の他、8 月 15 日（中秋節）、9 月下旬の「霜降節」には、ラオトンたち 10 数人が来て、ここに泊まって一緒に下雷鎮に行き歌墟に参加した。

壮族やヌン族の場合、旧正月と 7 月 14、15 日（中元節。「鬼節」、「7 月半」）が年中行事のなかでも特に盛大である。したがって、国境地域ではこの 2 つの行事が往来する機会となっている。正月

のチマキ、7月のアヒル、チマキは行事食として贈答に不可欠である。上記事例19ではラオトンは、訪問した際にそれらの供物を祭壇に供えたが、それは相手の祖先が「自分の祖先になった」ためである。旧暦3月3日の墓参の日には往来せず、中越双方でそれぞれ墓参を行う（事例20）。事例19・20ではラオトンが1人で、あるいは子供・孫と一緒に来るときもある（とくに子供がまだ小さい場合。事例20では正月の年賀には妻は同行しないという）[22]。旧正月および7月15日は、壮族のもとで、嫁入りした女性が帰省する機会でもあるが、それは国境地域のヌン族・タイー族も同様である[23]。この他、正月のみの往来の場合（大新県碩龍鎮A村梁E氏）、7月はベトナム側が1日早く過ごす場合（靖西県龍邦鎮黄X氏）がある[24]。

事例21は歌掛け祭り「歌墟」への参加である。壮族は歌掛けを好む伝統があり、歌祭りが各地で開催されてきた。ベトナムのヌン族も歌を好み、しかも壮族のそれと歌詞・旋律において共通する部分が少なくない。他方、タイー族の場合、歌詞・旋律が異なり、壮族とは歌掛けをすることにはなりにくい。このような歌墟で知り合って、ラオトンになったケースも少なくない[25]。旧正月に行われる「抛繡球」（数mもの長い棒の先に小さな輪を付けたものを立て、繡球を抛ってその輪を通す競技）も訪問の機会となる。靖西県龍邦鎮D村蘇D氏によると、中国側では廃れて10年以上開催していない。そもそも若者が広東へ出稼ぎに行ってしまい、この行事を支える人がいなくなってしまったが、ベトナム側ではまだ多くの地域で行われている。それは、かつては中国人がベトナムへ行き異性と歌を掛けあう機会となっていた[26]。さらに、かつては獅子舞が国境を越えて行われ、ラオトンが参加する場合があった[27]。

定期市について、国境地域では人々は国境線にかかわらず、近くの定期市で日用品を購入する[28]。とくに大新県の碩龍鎮、靖西県の龍邦鎮、ベトナム・チャリン県街区、ジョンヘン県街区などは人々がよく行くところであり、そこで知り合ってラオトンになる場合も少なくない。また、すでにラオトンになっていても、買い物の帰りにラオトン宅に立ち寄る機会が少なくない[29]。

定期市は、商品だけでなく情報の集積地でもある。現在では携帯電話で連絡をとることが可能になったが、少し前までは、人の多く集まる定期市での伝言の方法が用いられていた[30]。

10. 相互扶助

ラオトン同士の相互扶助として、困難に陥った時の金の貸借、食料の提供、病気見舞いと薬の提供などが挙げられる。前掲のように商売の際の支援もある。金銭の貸借については前掲事例13で取り上げたが、他に次の事例がある。

【事例22】ジョンヘン県ダムトイ社L村リー・ウェン・B氏（2012年調査）

氏が喘息を患って治療費が足りなかったときに、中国のラオトンから金銭を借りたことがある。氏は喘息のため、ジョンヘン県街区の病院に2週間入院したことがあるが、現在も完治しないままで、この状態が3年間も続いている。薬を注射すれば効くのだが費用がかかる。入院の際に費用が足りずに、まず同族に、ついで姻族に相談したが資金がなく、ラオトンと他の友人たちにも頼んだが結局ラオトンが千元出した。

【事例23】大新県碩龍鎮A村梁H氏（2012年調査）

氏には8人のラオトンがいる。うち「阿注」は最も親密なラオトンである。1958年、中国が生活困難のときにベトナムに行って米・油をただでもらった（1回につき米100斤、ラード1、2斤）。1965年に生活が改善されるまで食料の援助がずっと続いた。それ以降、1979年からの中越戦争時の2、3年間を除いて往来している。今でも往来がある。

【事例 24】チャリン県ホンゴク社 N 村ホアン・ウアン・F 氏

文革中に、国境をはさんで隣接する靖西県龍邦鎮 N 村の人が来たので米、ご飯をあげた。1960 年代に米やモノが不足したときには逆に中国側からもらった。食料の支援を頼む際にはラオトンまたは「ポンヨウ」の家に行く。10 年前、農繁期には龍邦鎮 N 村の人に手伝ってもらった。当時、向こうには若者が多かった。この 2 年間は、龍邦鎮 N 村は農繁期になると、ハークワン県 D 村のヌン族に 1 日 24 万ドン（人民元で約 80 元。食費込）の賃金を払って頼んでいる。

【事例 25】靖西県龍邦鎮黄 X 氏

1990 年にベトナムのラオトンがクズ鉄を回収して販売する商売を始めた。ラオトンが毎日多量のクズ鉄を集めて国境まで持参し、氏が引き取って売った。クズ鉄は良い値段で売れるが、ラオトンにだけ売った。後に 2 人で鉄木、まな板の売買もした。鉄木は門戸の枠に使う硬い木材だ。1990 年代から 10 年余続いた。ラオトンは中国からの帰途、ビール 10 数箱を持って帰り、チャリン県の商人に売った。1993 年頃からは氏はベトナムで水牛を仕入れて中国で販売する商売を始めた。国境までラオトンに送ってもらった。後に広東人商人がこの商売に乗り出してから価格が高騰したので商売をやめた。

事例 22 は病気の入院治療という事態に際して、ラオトンに借金をした事例である。注意したいのは、結局ラオトンがカネを出しているが、借金を頼む順として、父方同族、姻族、ラオトンの順になっている点である。この他に、ラオトンの父が病気になったことを知って、薬を贈った事例もある [31]。また、病気以外の借金の事例も少なくない [32]。事例 23・24 は食料の援助の事例である。事例 23 は 1958 年の「大躍進」政策の失敗により生活困難に陥った中国側がベトナムへ行って食料の援助を得た事例であり、事例 24 は文化大革命の混乱で再び生活苦に陥った中国側が食料を仰ぎ、逆にベトナムが食料危機に陥った際に中国側から支援を得た事例である。これらの場合、ラオトンを頼りに、食料援助を得ている [33]。なお、事例 24 の後半には農繁期の手伝いの記事が見える。田植え・収穫の農繁期に、10 年前までは中国側から手伝いに来てもらったが、ここ 2 年間は中国側でベトナム人を農繁期に雇用するようになっている [34]。なお、ラオトンに農繁期の手伝いに来てもらう事例は少ない。一つには中国側の経済発展、また家族の一員として扱われるような大事なラオトンに農作業をさせるのを肯んじないという心理的な要因も考えられる [35]。

事例 25 は商売の際の援助の事例である。ラオトンとは信頼関係で結ばれているのでこのような場合は少なくない [36]。前掲の事例 3 もそのことを示している。

11. 呼称

本章では、ラオトンとその家族同士がどのように呼びあうのか検討する。

【事例 26】大新県碩龍鎮 S 村方 Z 氏およびそのラオトンのハラン県リーコック社 L1 村ベイ・ウァン・N 氏

方 Z 氏によると、相互の呼び方は直接名を呼ぶ。ベイ・ウァン・N 氏に対しては中国語名あるいは「阿某」と親しみを込めて名前の一部を呼ぶ。ラオトンの子は氏を「バートン」（父であるラオトン）と、氏の妻を「マートン」（母であるラオトン）と呼ぶ。

ベイ・ウァン・N 氏によると、相互の呼称は「ポンヨウ」あるいは「ウオー」（私）・「ニー」（あなた）と呼ぶ。ラオトンの子は氏を「バー」（父）と呼ぶ。バートンと呼んでも良いがバーのほうが良い。氏はその子を「ロック」（子）と呼ぶ。ラオトンの子と氏の子は「ビ・ノン」（兄・弟）と呼ぶ。ヌン語の場合、兄弟・姉妹ともにビ・ノンと呼ぶ。ラオトンの唯一の基準は呼称である。それゆえラオトンの子は相手を「父」を意味する言葉で呼ぶ。そうでない場合は「マッ（ジュー）」（伯）・「ソック」（叔）と呼ぶ。

【事例 27】ジョンヘン県ダムトイ社 L 村ブン・ウァン・G 氏

中国のラオトンとは互いに「ラオトン」と呼び、ラオトンの夫人を「メイトン」（ラオトンの妻）と呼ぶ。自分の子とラオトンの子同士・孫同士は「ゴー」（哥）・「ノン」（弟）と呼ぶ。女児同士は「ノンサウ」（姉妹）と呼ぶ。先方の子は私を「バートン」、先方の孫は私を「ゴントン」（祖父であるラオトン）と呼ぶ。ラオトンは私の子・女児を「ロック」（子）と、私の孫を「ラン」（孫）と呼ぶ。

いずれも壮語やヌン語の呼称をカナにしているので若干のズレがある。また、事例 26 の「ウオー」「ニー」のように中国語、さらにベトナム語が交じる場合もある。ここで重要なのは、自分のラオトンの子が自分を「バー」（父）あるいは「バートン」（父であるラオトン）と呼ぶことで、とくに事例 26 では「バー」（父）と呼ぶほうが良いと言い切っている。その理由としてラオトンの唯一の基準は呼称であることが明言されている。当然、ラオトンの父母にたいしても「父」（バー）・「母」（メイ）と呼ぶことになる[37]。「バートン」「メイトン」という「ラオトン」を想起させる呼称の他は、ラオトンの子供同士が「兄弟」「姉妹」と呼び合うなど、全て実の家族のそれと同じである。ラオトン相互の呼称に関しては、事例 26 では名前や私・貴方、事例 27 では「ラオトン」と呼んでいる。中国側でもラオトン同士が「ラオトン」と呼ぶ場合も少なくない〈靖西県龍邦鎮 D 村蘇 C 氏（71 歳、男、2011 年調査）、大新県碩龍鎮 A 村梁 H 氏〉。この他、ラオトンの夫人は自分を「ボー＋長子の名＋トン」と呼ぶ[38]など、テクノニミーが使用される場合もあるが、そうした呼び方は壮族などの間で日常的に使用されている呼称である。以上から呼称の上でも、ラオトンは多くの場合家族の一員として扱われていたことが指摘される。

12. 子の世代の往来

先に婚礼・葬式・長寿祝い、あるいは呼称など、さまざまな場合でラオトンは実の家族同様に扱われることを指摘したが、こうしたラオトン関係を結ぶ場合、子の世代あるいはそれ以降の関係はどうなるのであろうか。というのは、そのことがラオトンという存在を解明するための一つの重要な鍵になるよう思われるからである。

【事例 28】靖西県龍邦鎮 N 村趙 K 氏（2009 年・2012 年調査）

氏の父にはラオトンが少なくとも 2 人はいた。父もそのラオトンも故人であるが、チャリン県ソンノイ社 L 村に住む父のラオトンの長女が 2006 年に結婚したときに、祝儀 100 元を持参して行った。2010 年、氏の父が死んだとき、チャリン県ホンゴク社 N 村のラオトンの長男が香典 100 元、タバコ 2 カートンを持参して来た。氏はその父のラオトンの長男をノン（弟）と、先方は氏をビ（兄）と呼ぶ。

父のもう 1 人のラオトンはチャリン県ホンゴク社 N 村にいた。そのラオトンの長男と氏とは幼少の頃からの友人であり、一緒に遊んだ「ポンヨウ」である。父のラオトンの長男は氏を「ビ」（兄）と、氏は先方を「ノン」（弟）と呼んだ。父のラオトンの夫人が死んだとき、氏は商売で多忙だったので、氏の夫人と子供が線香・菓子を持参して行った。氏自身にもチャリン県街区にラオトンがおり、牛の仲買商売をしていたとき、元手が不足していた際に金を貸してもらった。なお、祖父のラオトンは知らないし、その家族との往来もない。

【事例 29】大新県碩龍鎮 S 村方 Z 氏およびハラン県リーコック社 L1 村ベイ・ウアン・N 氏

方 Z 氏によると、ラオトンの子と氏の子との間には往来は無い。ベイ・ウアン・N 氏によると、曽祖父の代から付き合いが続いている場合もある。ただし文字記録がないから正確には何代のラオトンの関係かはわからない。村に残ったラオトンの子とは時々往来するが、他処に行った子は付き合いが無

い。理想的には5、6代続いたらよいと思う。N氏の父は、国内の者をも含めて少なくともラオトンが10人はいたが、N氏はその子たちとの付き合いがある。父のラオトンの子とは、N氏の3人のラオトンと同じくらいの親しさである。祖父にも多くのラオトンがいた。その子孫でとくに親しい人はいないが、婚礼や葬式に行くなど付き合いはある。

事例28の場合、居住村が互いに隣接しており、別々の国家に分かれながら人の頻繁な交流という点で一つの地域社会をなしている。趙K氏は父のラオトンの子と幼少より親しく付き合っている。「ポンヨウ」は年齢集団である（注32参照）。この場合、国境を越えて1つの年齢集団が形成されている。なお、趙K氏自身も別個にラオトンを持っており、2代にわたって付き合いの関係が続いている。3代までは続いてはいない。しかし、ラオトン自体は1世代限りである。

事例29の場合、子供の世代での付き合いの有無について意見が分かれている。方Z氏とそのラオトンのN氏の子の間には往来がない。しかし、N氏の父・祖父のラオトンの子孫の場合、父のラオトンの子とは付き合いがあって、なおかつ親密である。祖父のラオトンの孫の場合、同じ地域社会において付き合いがあるものの、さほど親密ではない。さらにN氏の願望として、ラオトンの子孫の関係が5、6代も続くことが挙げられている。ここで注目されるのは、N氏の言として、ラオトンの子であっても他処へ移住した場合、付き合いがなくなるという点、他方で、関係の継続性に対する理想を持っている点である。なお、付き合いがあっても、それはラオトンの子孫だからなのか、あるいは同じ地域社会に住むがゆえなのか判断が困難である点も見逃せない。次に、実際に5代にわたって関係が続いている事例を挙げよう。

【事例30】チャリン県コーモイ社C村ロック・フォン・L氏（57歳、ヌン、男）

L氏の曽祖父のラオトンが3km離れた靖西県龍邦鎮D村にいた。ラオトンの子G氏（85歳）には長女（32歳）、長男（35～36歳）、次男（27～28歳）の3人の子供がいる。L氏はG氏をジュー（オジ）と、G氏はL氏をラン（甥）と呼ぶ。L氏の男児はG氏の男児をエム（弟）と、相手の男児はL氏の男児をエム（兄）と呼ぶ。婚礼・葬式の際に往来している。最近、G氏の長女の娘（18歳）の結婚の通知を受けた。祝儀100元を持参してD村まで祝いに行った。以前はG氏が時々ここに来たが、この3年間は年老いて足が悪いゆえ歩行が困難になって来ていない。

L氏には3女1男がいるが、2003年、息子（26歳）が結婚した際に、G氏は祝儀20元を持参して祝いに来た。ちなみに、この金額は親戚が包むのと同額だ。G氏が73歳の時、長寿祝い「康」をしたが、そのときL氏は1人でニワトリ1羽、布（「康」字を染めたもの）1枚、モチ（バインチュン）4個を持参して行った。ブタ1頭を贈りたかったが、貧乏なのでニワトリを贈った。L氏の父（故人）の命日に、G氏夫婦が以前は毎年来た。

G氏の息子たちは、他の若者たちと同様、広東へ出稼ぎに行っており、D村には老人だけが残されている。L氏と曽祖父のラオトンとは、L氏の息子の世代をも含めて付き合いが5代続いている。L氏の希望は、今後も関係を続けたいというもので、L氏はそのことはビ・ノン（キョウダイ）だから当然のことだと思っている。

C村は国境に接しており、中国側と姻戚関係にある者が少なくない。ところが、筆者の調査した限りでは、中国側の村民とラオトン関係にある場合はむしろ少ない。国境地域において、国境をはさんでいくつかの村が、通婚を含む相互往来が頻繁という意味での狭い地域社会を形成しているようである。しかも、この場合、両者の個人レベルでの関係がきわめて良好なため関係が続いており、普遍というよりも、むしろ特殊に近いと考えられる。しかも、中国側では若い世代は広東に出稼ぎに行ってしまい、残された老人と付き合いを保つだけである。こうした点を考えると、次の事例がより実態に近いように思われる。

【事例 31】靖西県龍邦鎮 Q 村農 C 氏（2011 年調査）

ラオトンになれば、3 代にわたって人が往来する。関係の良い場合は 3 代続く。よくない場合は 2 代で途絶える。氏の男児とラオトンの譚 L 氏の男児との往来はある。譚 L 氏の男児はよく来る。その際に氏の男児が在宅の場合は、一緒に酒を飲む。氏の孫とラオトンの孫との往来はない。なお、父のラオトンを受け継ぐ例は、村の老人から以前のこととして聞いたことがあるが、本村には実例がない。

関係が良い場合 3 代続くというが、実際は孫同士の往来は少ない [39]。子同士の往来はあるが、両者の個人的関係性の良し悪しによるようで、この場合は良好であるので関係が子の代まで続いている。関係の良し悪しは、双方の個人的な性格が合うかどうかにかかっている。性格が合わない場合、ラオトンの子とのつきあいがなくなるであろう。しかし、個人的な事情によるものの、よほど性格が合わない場合以外、総じて言えば、ラオトン本人を含めて 2 代までのつきあいが多いようである。このゆえ、次のような婚姻規制が生じてくる。

【事例 32】靖西県龍邦鎮黄 X 氏

ラオトンの子同士は結婚できない。兄弟姉妹と同じで、家族同様であるためである。

事例 32 で、ラオトンの子同士が結婚できないのは、先の「兄弟」という呼称に見えるように、少なくともラオトン存命中は家族同様だからである [40]。とはいえ、極端な場合、ラオトンは一代限りという言説がある [41]。

ラオトンが存命中はその子を含めて家族の者とも往来がある。しかしラオトンが死去した場合、その子同士の付き合いは、個人のレベルでの関係が良い場合に限られてくる。父の紹介によってラオトンになった場合、一代さえも続かない場合がある [42]。この点からも、ラオトンは親族扱いを受けてはいても、あくまで個人的な関係が基本であることが指摘される。また、上記の事例 30 の、5 代にも及ぶ付き合いの事例がベトナム側のものであることに注意する必要がある。事例 29 でもそうした長い付き合いの理想像はベトナム側で語られがちである。

【事例 33】ジョンヘン県ダムトイ社 L 村ブン・ウアン・G 氏

ラオトンの子は勉学で北京へ行ったゆえ、氏の子との交流はない。ラオトンの子同士の交流は場合による。昔は交流があったが、今は出稼ぎで村を離れるので交流がない。しかし概ね「二代まで関係が続く」。

関係は二代まで続くものの、子同士の交流は場合によるのである [43]。とりわけ現在の若者層の場合、出稼ぎによって村を離れる場合が少なくない。次にはこうした最近の世代間断絶についてふれよう。

13. 世代による断絶

現在、とくに 60 歳以下の世代の場合にラオトンを持たない人が増加している。その要因は、1979 年に中越戦争が勃発し、しばらくは相互の往来が途絶えたこと、また 1990 年代以降、出稼ぎによる移住で離郷する人々が急速に増加したことに求められる [44]。時代とともに人々の間の風潮も変化した。龍邦鎮黄 X 氏によると、今の若者はラオトンを好まず、普通の友人を好むという。その要因として、婚礼や葬式の際の往来をはじめ、ラオトンになることによって生じるさまざまな慣習が嫌われがちなことが挙げられる。人々をとりまく全般的な環境の変化にともない、ラオトン関係が薄れて行く傾向にあるのである。その点は次の事例に詳しく述べられている。

【事例 34】チャリン県政府某氏

今は若者の間ではラオトンの習慣は薄れた。以前は親友であればすぐラオトンになったが、今はならない。以前は正月や儀礼のたびに交流し、村中がにぎわったが、今はそのような状況は見られない。昔は村の中では 9 月～ 3 月の農閑期は仕事がなく、ラオトンとの交流で時間をつぶした。今は出稼ぎ、進学で都会に行く機会があるし、仕事が増えた。交通も以前は歩行したが、今はバイク、車を使い、交通が発展して泊まる必要がなくなった。以前は歌掛け大会が盛んで、ラオトンの家に行って歌ったが、今は歌掛け大会がない。以前は経済的観念が薄かったが、今は経済的観念が強くなっている。若者は学校の同級生など別のやり方で人とつきあい、ラオトンを古いものと見なしている。このようにラオトンは現代の社会発展に適応しなくなっている。

これはベトナム側の地方政府の側からの見方であるが、交通の発展、出稼ぎ、学校での付き合い、伝統的な歌掛けの衰退、経済発展にともなう経済的な観念の萌生など、社会の風潮が大きく変化したのである [45]。

14. 人々の意識におけるラオトンの重要性

筆者は調査の過程において、父方同族、姻族、村の年齢集団に属する朋友などと比べて重視するものの順位付けについて質問をした。個人の状況やラオトンとの関係性の違いによって、即答できない場合やそもそも比較できない（ジョンヘン県ダムトイ社 L 村ブン・ウアン・G 氏）、中国人ラオトン・親戚とも同じくらい重要で「兄弟同然」〈チャリン県ソンノイ社 L 村ホアン・ウアン・D 氏（61 歳、男、タイー族）〉という回答、ラオトンは「一家人」（靖西県龍邦鎮 J 村農 G 氏）、「一家のような間柄」（靖西県龍邦鎮 N 村趙 K 氏）、「兄弟のよう」だから他と同じくらい重要だ（ジョンヘン県ンゴック・コック社ホワン・ハイ・S 氏）、という回答もあったが、総じていえば、まず父方同族、ついで姻族、その次にラオトンが来る場合が多かった。

村の年齢集団に属するポンヨウ（ホージー）は、ラオトンよりも同等あるいは下位に置かれる場合が多かった。大新県碩龍鎮 S 村の方 Z 氏によると、ラオトンは正確には「家の者」ではなく、「心を知る朋友」ゆえ、重要度において血縁者よりは低く、仲のよい友人よりは高いという。しかし村の年齢集団に属するポンヨウもラオトンと同等に親しいという。この点は中国側とベトナム側とで若干のズレがあるようで、村の年齢集団に属するポンヨウは、中国側でベトナム側よりも位置付けが高いよう思われる [46]。この点、「ラオトンはタイ語の呼称で、中国側での発音は朋友（ポンヨウ）である」（ハラン県ミンバン社 B 村ノン・ウアン・S 氏）という言説が聞かれた。

総じて言えば、上記のように、ラオトンは父方同族、姻族に次ぐ重要な存在として認識されてきたことが指摘されよう。事例 22 においても借金を頼む順番はそのようになっており、そこから重要度の度合いが窺い知られる。

15. 人々の意識におけるラオトンになる目的

筆者は調査の過程において、ラオトンの重要度とともに、なぜラオトンが必要なのか、その目的について質問した。14 章の質問と違って、聞かれた側はほぼ即答が可能であり、しかも本質をつくものが多かった。そのうえ、総じて中国側とベトナム側とで大きな隔たりがあるよう感じられた。すなわち、中国側で聞かれたのは「困難があると助け合う」〈大新県碩龍鎮 A 村許 L 氏（46 歳、男、2010 年調査）〉という相互扶助を挙げた回答が多かった。なかには「向こう（ベトナム）に行くための拠点」（靖西県龍邦鎮黄 X 氏）、「商売のため」という回答もあった。個別的には、「ラオトンを持つのは自然なこと」（龍

邦鎮J村農G氏)、「習慣」(大新県碩龍鎮A村梁E氏)という回答もあったが、ラオトンを持つことの実用的、実利的な側面を意識している人が多かったようである。[黄 1985] でも、それは皆が互いに助け合い、頼りにしあう一種の方法であると指摘されている。

これに対して、ベトナム側では「相性のある人」「性格の合う人」がなるもので、特定の目的はない、という回答が多かった。個別的には「青年の時に一緒に遊んだり、雑談をするため」(ジョンヘン県ダムトイ社L村ブン・ウアン・G氏)という回答も見られたが、総じて互いの感情的な側面が重視される場合が多いようである。おそらくは、本来はベトナム側で言われるように、損得や実用性は抜きにして、双方が感情の上で一致する場合、ラオトンになっていたのが、付き合いにともない派生する相互扶助という実利的な側面が中国側でより重視されるようになったものと思われる[47]。

16. 整理

以上に検討してきたように、ラオトンは家族の一員としての待遇を受けた。結婚式や葬式、長寿祝い、家の新築祝い、年中行事、定期市などの機会に往来しあった。とりわけ葬式は重視された。ラオトンの父母の死が実の父母の死と同様に見なされた。そのことは出棺の際の位置に如実に現れている。ラオトンが家族同様に見なされていたことは、ベトナム側でとくに盛大な長寿祝いの場合の礼物や儀礼の際の位置にも現れている。さらに呼称にも明確に現れている。

ラオトンの親密な付き合いが子や孫の世代に継承されることについては、双方の性格が合う場合に、その子の世代までは続くが、孫の世代までは続かない場合が多い。従ってラオトンが家族としての扱いを受けてはいても、やはり個人的な関係が基本であることが指摘されよう。個人にとってその重要性の位置づけは、概ね父方同族、姻族に次ぐものである。

なお、長い世代にわたって関係が続くという理想像が、とくにベトナム側で語られがちである。ラオトンを持つ目的について、中国側で実用・実利的側面が重視され、ベトナム側では感情的側面が重視されがちで、両国の間には差異が見られる。この差異は(ともに少数民族ではあるが)両国民の思考様式の違い、ひいては民族性の違いがそこに反映されているよう思われるのである。

国境地域に暮らす人々は、国境を越えてラオトン関係というネットワークを維持してきた。この関係は、国境地域の人々の、同じ言語を話す、一種の仲間意識「講土意識」(地元の共通の言語「土話」を話す集団としての意識)[48]を持つ諸集団を支える柱の一つであり続けたように思われる。しかし近年は、中国側で若者の出稼ぎ移住による若年人口の国境地域からの流失、また経済発展などにともない社会の風潮が変化し、若者層のラオトンに対する意識が急速に変化している。こうした動きが人々のネットワークや「講土意識」に及ぼしている影響について、国境地域とそこに暮らす人々に注視し続ける必要がある。

注

(1) 管見の限りでは、中国では黄漢英の簡単な紹介文があるのみである。そこでは、靖西・那坡・徳保(県)一帯の壮族農村に残されている「古風な民間習俗」として、「トン」(同。その俗称が「ラオトン」とされる)が取り上げられ、その条件、儀礼、年中行事や婚礼・葬式の際の往来、目的が概観されている。ただし国境を越えるラオトン関係についてはふれられていない[黄 1985:130]。

(2) 壮族は人口約 1,618 万人(2000 年)と、中国少数民族のうち最大の人口を有する。広西壮族自治区を中心に居住する。タイー族は人口約 1,477,500 人(2009、[今村 2012: 55-58])で、ランソン、カオバン、ハザン、トゥエンクワン、ラオカイ、タイグエン、イェンバイなどの省に居住する[伊藤 2003:16]。ヌン族は人口約 97 万人(2009、[今村 2012:55-58])で、ランソン、カオバン、クアンニン、ハザン、トゥエンクワン、ラオカイなどの省に居住する[伊藤 2003:16]。本稿では、中国の大新県・靖西県の調査(2010 年 8 月、2011 年 8 月、2012 年 8 月)で得た事例とカオバン省チャリン県(2011 年 1 月)、ハラン県(2011 年 1 月)、ジョンヘン県(2011 年 11 月、2012 年 11 ～ 12 月)の調査で得た事例をもとに検討する。なお、事例の中の人の年齢は調査の時点のものである。

(3) 1 人の人が持つラオトンの人数には制限がない。本稿では中国とベトナムの国境を越えたラオトン関係の検討を目的とす

るが、それぞれの国内にラオトンが複数いる場合が少なくない。また、多くの場合、それぞれの家庭の経済状況は問題とされない。双方の居住地の間の距離は重要ではないが、概して、日帰りで歩行して往復することが可能な場合が多い。なお、靖西県龍邦鎮黄X氏によると、かつて、「合八字」でラオトンを決める場合があった。氏はこれをしなかったが、老人の世代では重視されており、氏の父はこれをした。八字とは、双方が生まれた年・月・日・時間を8つの漢字で表記したもので、かつて結婚の際の相性占いに使われた。

(4) 黄漢英によると、まず何れかの側の父母が子を連れて、菓子類などの礼物を持参して相手側へ行き、相手側が食事を用意してもてなすという［黄 1985：130］。

(5) ラオトンは少なくとも親戚なみの贈り物をする。たとえばジョンヘン県ダムトイ社L村ブン・ウアン・G氏（74歳、ヌン族、男、2011年調査）によると、氏自身の婚礼に中国のラオトンK氏は鏡1枚を贈った。他のベトナム人ラオトンは貧しいゆえ少々の祝儀を持参したのみであった。1981年、ラオトンK氏は長男の婚礼に来た。K氏は祝儀を贈ったが、その金額は親戚の贈り物と同じくらいで、500gのブタ肉を買える額だった。今は祝儀の金額が増加し、親しい場合は3、4kgのブタ肉を買える額になっている。

(6) この事例は少なくない。たとえば大新県碩龍鎮A村梁E氏によると、2010年にベトナムのラオトンの女児が結婚したときに人民元50元を贈った。

(7) 中国では祝儀として現金を贈るのが一般的になっているが、ベトナムではまだ米・酒が贈り物として不可欠である。たとえば、ジョンヘン県ンゴック・ヘイ社H村ノン・ウアン・C氏（40歳、ヌン族、男、2012年調査）によると、2009年に長女が、2010年に長男がそれぞれ結婚したとき、国内のラオトン夫婦が米10kg・酒3ℓ・祝儀30～40万ドンを持参して来た。長女の場合、祝いの品にさらに魔法瓶、洗面器が加わった。

(8) 今は広東に出稼ぎに行った子供が現地で嫁を見つけて子供を産み、帰郷した際に結婚と子供の誕生を一緒に祝う宴会「双喜酒」が少なくない。

(9) 外的状況として両国の政治的な関係も挙げられる。1979年の中越戦争のときは相互の往来ができなかった。個人的な事情は多様だが、家庭の経済状況が重要である。なお、婚礼の際の儀礼として次の事例がある。靖西県龍邦鎮D村蘇D氏（67歳、男、2011年調査）によると、1966年、ラオトンの結婚のときに5、6人の朋友と一緒に行った。新郎に贈る衣服1セット、先方の神棚に貼る対聯、祝儀1元を持参した。氏とラオトンは神棚に近い主卓に座り、ベトナム側の娘たちは喜んで料理や水タバコを勧めた。氏は夕食の途中で、ラオトンと一緒に祖先を拝んだ。その際に「発財」「生男生女」と縁起の良い文句を唱えた。拝敬をする順序は、祖先、父母、兄弟、朋友である。

なお、靖西県龍邦鎮Q村農C氏によると、ラオトンの子の婚礼の際にラオトンが未婚なら来ることができない。子の出生のときにもラオトンが未婚だと来ることができないという。

(10) この点について次の事例もある。ジョンヘン県ダムトイ社L村リー・ウアン・B氏（50歳、ヌン族、2012年調査）によると、氏のラオトンのK氏の父が死んだ際に、その兄弟が知らせに来たので行った。歩行で埋葬の日だけ行った。出棺の際にラオトンとともに白い頭巾をかぶって棺桶の前を歩いた。埋葬した後に昼食をとった。

(11) 普通、ブタ1頭は死者の娘・娘婿など、ごく親しい関係にある者が贈る。

(12) 道士の誦経は普通語でなされる。ただしジョンヘン県ダムトイ社L村では道士の「普通語」の発音は聞き取ることができない「昔の言葉」を使用しているという。おそらくヌン族が中国からベトナムに移住して後、誦経の言語が変化したよう思われる。いずれもしても一般のベトナム人には聞き取れない。

(13) この点について次の事例がある。大新県碩龍鎮D村方Y氏によると、1991年、伯父が死んだとき、ラオトンのノン・ウアン・Y氏は夫婦で果物・菓子といった供物を持参して来た。白い孝布を着けた。この地域では、葬式は親戚のみに通知し、ラオトンに通知はしないが、それでも来て、数日間泊まって葬儀に参加したという。

(14) この点については、次の事例に明示されている。靖西県龍邦鎮D村蘇D氏によると、母が1964年に死んだときに、ラオトンが調理済みのオコワ1籠、ニワトリ1羽を持参して1人で来た。昼飯を食べて日帰りで帰った。「男児の身分で」来たので、孝巾を巻いた。

なお、次の事例はラオトン自身の葬式には行かないことが示されている。ジョンヘン県ダムトイ社L村ホアン・ウアン・S氏（64歳、ヌン族、2012年調査）によると、以前、中国にラオトンがいた。去年死去したが、その葬式には行かなかった。ラオトンの父母の葬式には行くが、ラオトン自身の葬式には行かない習俗だからである。

(15) この点について、靖西県龍邦鎮の黄X氏の場合、2001年、夫婦でラオトン宅の新築祝いに、大きな模様入り鏡を持参して行き、先方に1晩宿泊した。ラオトンはその際に国境までオートバイで送迎をした。

(16) 焼きブタ1頭を持参する事例として次のものがある。靖西県龍邦鎮黄X氏によると、ラオトンの父が73歳のとき祝賀に参加した。祝儀100千ドンのほか、氏の名を焼きブタの上に書いて貼ったものを贈った（ブタは皆で金を出し合って購入した）。祝いの時の座る位置は、氏はラオトンとともに第1列だった。第2列には女性たちが座る。氏は1人で行った。ハラン県ミンバン社B村ノン・ウアン・S氏（48歳、タイー族、男）によると、61歳、73歳の長寿祝いをするときは親戚・ラオトンは焼き豚あるいは去勢したニワトリ・モチ米・酒を持参する習慣がある。焼きブタは親戚のみが贈る地域もある。ハラン県リーコック社L1村ベイ・ウァン・N氏によると、村では長寿祝いは焼きブタを贈るのは親類のみで、ラオトンは祝儀を贈った。そこでは葬式にもラオトンがブタを贈ることはない。

靖西県龍邦鎮N村趙K氏（55歳、男、2010年調査）によると、父のラオトンが61歳の時（当時氏は20数歳）には3人兄弟で父について行った。布（紅色）1枚、鏡（布と同様、紅色で「寿」字を書いた。他に贈呈者の名、

祝いの言葉を道士に頼んで漢字で書いた)、米 20 斤、酒 20 斤、祝儀 50 元を贈った。それらは当事者の親戚が贈るものと同じである。このように、ここでは焼きブタはないが、親戚が贈るものと同じものを贈っている。なお、1979 年、ラオトンの父が 73 歳のときは中越戦争が勃発したため行けなかった。

靖西県龍邦鎮 D 村蘇 D 氏によると、D 村にも福寿康寧の祝いがあるが、ベトナムではこれを盛大に祝う。経済状況が良ければ焼きブタ 1 頭を贈るというが、ラオトンがこれを贈ったことはない。焼きブタの贈答はあくまで個人の経済状況によるという。

(17) ただし靖西県龍邦鎮 N 村趙 K 氏によると、氏の父の代にはしていたが氏の代にはやらなくなった。

(18) 大新県碩龍鎮 A 村梁 E 氏によると、誕生日には祝いに行かない。60 歳以降に祝いを催すが毎年はしない。中国側では 60 歳、70 歳の誕生日に祝いが行われるが、ラオトンはとくに招待せず、親戚を呼ぶのみであるという。

(19) ベトナム側でも最近はやらないよう変化した地域が見られる。ジョンヘン県ダムトイ社 L 村リー・ウアン・B 氏によると、61 歳、73 歳、85 歳の祝いは最近はやらないという。チャリン県ホンゴク社 N 村ホアン・ウアン・F 氏(62 歳、タイー族、男)によると、長寿祝いは以前はしたが今はやらない。1979 年の中越戦争の時点から中断したままであるという。

(20) 大新県碩龍鎮 A 村梁 H 氏(2012 年調査)によると、氏の災難除去のため道士に来てもらい儀礼をしてもらったが、このときラオトンのみが来て親戚は来なかったという。

(21) ジョンヘン県ダムトイ社 L 村フー・ウアン・L 氏(47 歳、ヌン族、男、2012 年調査)によると、儀礼の規模が小さい場合、ラオトンを呼ばない。氏のラオトンが道士を呼んで求福儀礼をしたことがあるが、その時は呼ばれて 1 人で行った。先方の安花儀礼にもに招待された。それは子供の出生後満月のときに行われ、50 元の祝儀を持参して行った。道士を呼ばない場合もある。同県ダムトイ社 L 村リー・ウアン・B 氏によると、家中で不幸が起きたときでも、道士は呼ばない。病気のときは直接病院へ行くという。

(22) チャリン県ホンゴク社 N 村ホアン・ウアン・F 氏によると、2010 年は正月 1 日か 2 日に 1 人でラオトンの家へ行った。何も持参せず、先方でご飯を食べた。期日は年によって違い、12 月 30 日の大晦日に行くこともある。子どもが小さいときには連れて行った。7、8 年前は、上等の酒 2 瓶、タバコ 1 カートン、祝儀(その頃は紅紙で包まずに、1 人 4,000 ドンを直接贈った)。チマキ、モチはもたない。帰るときは返礼に四方形のチマキを贈られた。国境まで送ってもらった。氏のラオトンは、正月 2 日〜 8 日に年賀に来た。日帰りで、妻と一緒の時もあるし 1 人のときもあった。ラオトンが春節に来たとき、1 人で四方形のチマキ 2 個(1 個 2 斤相当)、落雁 6 封(1 包 2 両、あるときは 4 包)、去勢した大きなニワトリ 1 羽、祝儀 1 人 4,000 ドンを持参した。帰りにチマキ・果物・菓子を贈り、安全にベトナムへ帰れる場所まで送った。ラオトンは 7 月 14 日に以前(7 年前)に子供を連れて来た。アヒル 2 羽を持参して来た。氏はニワトリ 1 対を贈った。モチを贈る時もあった。「7 月半」について、中越戦争後、ベトナムでは 1 日早く過ごすようになった。

(23) ジョンヘン県ンゴック・コック社 P 村リン・ウアン・C 氏によると、正月 1、2 日〜 15 日、7 月 15 日に互いに訪問した。正月は、ニワトリかアヒル 1 羽、酒 1 本、モチ 4 個を持参した。氏は家族(母、妻、息子 2 人)をともなって訪問した。ラオトンも家族ぐるみで、同じ礼物を持参してきた。7 月 14、15 日には子供を連れて、ニワトリ 1 羽・酒 1 本・モチ 4 個を持参して行った。7 月 15 日は家族で嫁の実家へ帰る日だ。ラオトンは 7 月には活魚・アヒルのロースト(烤鴨)1 羽を持参して来た。国境までバイクで送り、そこから車で帰った。2、3 年前から通行証の期限が 1 日のみになったゆえ、今は日帰りで行く。

(24) 「7 月半」にベトナム側で 1 日早く過ごすことについては注 22 を参照。それらの他、6 月 6 日、8 月 1 日にも往来する場合があった。大新県碩龍鎮 S 村方 Z 氏(2010 年調査)によると、正月 5 日〜 6 日に 1 人で行った。先方が来る場合もあった。3 月 3 日は墓参の日ゆえ行かない。6 月 6 日の「農忙節」(田植え終了後の祭り)に行った。7 月 14 日は、ともに母国で過ごした。新暦 8 月 1 日の中国側での「解放軍」祭に、彼らが来るときもあった。氏が向こうに行く際には、先にラオトンの N 氏の家に寄った。

(25) 大新県碩龍鎮 A 村梁 Z 氏(70 歳、男、2012 年調査)は、ベトナムに親戚、ラオトン 3、4 人、朋友がいる。ラオトンはクワンホア県のリァン・ウァン・F 氏(80 歳、ヌン族)で、中学教師をしており、氏より 10 歳年上だ。1958 年、旧暦 3 月 15 日の碩龍街の歌墟に行き、親戚の紹介で知り合った。氏は今年も碩龍街の歌墟に行った。その際に氏がラオトンたち 10 余人を招待して自宅で一緒に食事をした。歌墟の期間以外の往来はない。碩龍鎮 S 村方 Z 氏によると、旧暦 3 月 15 日は、碩龍鎮の建立記念日で、通常の定期市より盛大で、龍舞・獅子舞が行われる。ベトナムからも数百人も来るという。

期日・場所を固定して行われる歌墟のほかに、中国、ベトナム双方の若者が出会った際に自然に行われる歌掛けもある。この点については[塚田 2010a:103-104]で指摘をした。

(26) 靖西県龍邦鎮 D 村蘇 D 氏のラオトンは、ハークワン県にいる。そこは D 村からは歩行で 1 時間半かかる。1965 年頃、氏が 18 〜 20 歳の頃に知り合った。春節に「抛繡球」(1 日〜 15 日)に行ったが、その時に D 村の男性が向こうの女性と歌掛けをした。歌掛けの際にラオトンの兄が氏にラオトンを紹介した。「抛繡球」はベトナムでは各村でまだ行われているが、D 村では若者たちが広東へ出稼ぎに行ったため、10 年以上はしていないという。

(27) ハラン県リーコック社 L1 村ベー・ウアン・H 氏(87 歳、タイー族、男)によると、一帯の獅子舞は武術(棒術)の披露をともなうが、氏は 20 歳の頃、毎年正月前の 2 カ月間ほど、中国のラオトンとともに碩龍へ行き武術を練習した。獅子舞団の団員は 20 人で、中国人 18 人、ベトナム人 2 人だった。中国のラオトン 2 人も獅子舞団に加入していた。獅子舞団は正月 1 日〜 30 日の間、中国の雷平県(現大新県)、ベトナム(当時は仏領)のジョンヘン県、カオバンの街の近くの村々を車で回ったという。

(28) 大新県碩龍鎮S村方Z氏のラオトンは日用品を購入する際に、ベトナム側の定期市が開催される地は遠いので、通常より近い碩龍の定期市に来る。なお、この点については前稿で事例を挙げて指摘した［塚田 2010a：93］。

(29) 靖西県龍邦鎮J村農G氏（2010年8月調査）のラオトンは、龍邦鎮での定期市のたびに米・ニワトリ・アヒルを持って売りに来るが、その際によく氏の家に立ち寄り食事をする。大新県碩龍鎮S村の方Z氏のラオトンも1人で来て、氏の家で一緒に酒を飲み昼飯を食べて帰る。

(30) たとえば、靖西県龍邦鎮N村の趙K氏の亡父のラオトン（チャリン県ソンノイ社L村）の娘が2006年に結婚したが、趙K氏は商売でチャリン県の定期市に行った折にその通知を受けたという。

(31) 靖西県龍邦鎮黄X氏によると、1996、97年頃、ベトナムのラオトンの父が病気になったとき、漢方薬（1箱20～30元で、県城で売っている）を購入して贈った。通知がなかったが、病気のことを知ったので進んで贈った。

(32) 靖西県龍邦鎮黄X氏の夫人のラオトンは女児が多く貧乏で、ビール箱を担いでビールを売って生計を立てた。1990年、氏は500元を出して運搬用に馬匹を買って贈った（当時の500元は今の5,000元に相当するという）。また、ジョンヘン県ダムトイ社L村フー・ウアン・L氏（47歳、ヌン族、2012年調査）は、ときどきラオトンから借金をしたが、とくに馬匹・化学肥料を購入するとき4,000～5,000元の借金をした。なお、靖西県龍邦鎮Q村農C氏（2011年調査）によると、氏にはホージー（年齢集団）7、8人がいた。8歳の時から一緒に遊び一緒に学校へ行った。1人が死去したが、他の者とはずっと付き合っている。借金をする時にはホージーから借り、ラオトンには借りたことがないという。なお、「ホージー」とは、地域によって「ポンヨウ」「バンヤウ」とも呼ばれ、同じ自然村のほぼ同じ年齢の同性者が子供のときから結成する年齢集団である。男性は終生、女性は子供が生まれるまで付き合いを保つ［塚田 2010b］。事例24の「ポンヨウ」はそのことである。

(33) 靖西県龍邦鎮黄X氏によると、氏の父にはベトナム・チャリン県にラオトンがいた。1960年代の困難な時期には父のラオトンが米を持ってきた。氏の父の子は全て男児で、父のラオトンの子は全て女児だったので、ラオトンは父の子を養子になるよう依頼をした。氏が5、6歳の頃、向こうに養子に行ったが、条件が劣るので1、2日後にすぐに逃げ帰った。その当時、1960年代初の中国は生活が困難で、父から見ると子供が1人養子に行けば生活が楽になるためだったという。こうした状態ゆえ、1960年代は龍邦鎮の定期市で売買する者の2/3がベトナム人だったという（今はベトナム人はそれほど多くない）。

(34) 1990年代半以降、広西の農村の若者層が沿海部に出稼ぎに行き労働力が不足し、それにともないベトナム人の雇用が国境地域で広く見られようになったことは前稿で事例を挙げて指摘した［塚田 2010a：101-103］。

(35) 靖西県龍邦鎮Q村農C氏（2012年調査）によると、田植えの際にはベトナム人を1人50元出して雇用するが、ラオトンは呼ばない。ラオトンに農作業をさせるのは「不好意思」（申し訳ない）からであるという。また、大新県碩龍鎮D村方Y氏（2011年調査）によると、農作業の手伝いは、ラオトンに頼めば無償だが、今はラオトン以外の人を1日50元（飯1食分を含む）で雇用するようになっている。ベトナム側のハラン県ミンバン社B村ノン・ウアン・S氏によると、農繁期には中国側が、1日10万ドンを出してベトナム側村民（男女とも）を雇用するが、通常、ラオトンの家には頼みにいかないという。なお、ラオトンに手伝いを頼んだ事例は［塚田 2010a: 101-103、115］を参照。

(36) 靖西県龍邦鎮Q村農M氏（2011年調査）によると、氏は以前、マンガン鉱石の交易をした。氏のラオトンが鉱石集めを手伝い、氏が馬幇（荷馬隊）を組織して運び、国境で車に積み替えた。後にラオトンがベトナムでの馬幇を組織するようになった。現在は中国側の大商人が買い取って県城に運送する体制になっている。

(37) ハラン県ミンバン社B村ノン・ウアン・S氏によると、互いにラオトンと呼ぶ。その父母をバー、メイと呼ぶ。相手の父母は氏をロック（子供）と呼ぶ。ラオトンの子は氏をバートンと、氏はその子をロックと呼ぶ。

(38) ジョンヘン県ンゴック・コック社P村リン・ウアン・C氏（2012年調査）によると、氏とラオトンは「ラオトン」、ラオトンの夫人を「メイトン」、その子を「ロック」、その孫を「ラン」と呼ぶ。ラオトンの夫人は氏を「ボー＋長男の名＋トン」、その子は氏を「ボー」、孫は氏を「オン」（祖父）と呼ぶ。

(39) 事例28の趙K氏の場合、関係が良好ゆえ、2代、3代と付き合いが続いている。趙K氏はその父のチャリン県N村のラオトンの長男をノン（弟）と、先方は氏をビ（兄）と呼んでいる。氏にとってラオトンではないが、実の親戚のように往来している。子供同士は「哥」「弟」「妹」と呼ぶ。向こうの孫は趙K氏を「伯」と呼んでいる。なお、趙K氏の孫はまだ幼いので、孫同士の往来はない。また、趙K氏によると、父のL村のラオトンの息子（25歳）は、7月14日の行事に趙K氏の家に来たこともある。先方の息子は、趙K氏の息子と平時に往来している。

(40) ジョンヘン県ンゴック・コック社P村リン・ウアン・C氏によると、ラオトンの子同士は結婚できない。孫は結婚可能だという。子同士が結婚できないのは、同県ダムトイ社L村ブン・ウアン・G氏も同じ意見である（2011年調査）。「同じ父」をもつゆえであるという。ただし、ダムトイ社L村リー・ウアン・B氏のように、ラオトンの子同士は結婚可能とする場合もある。

(41) 大新県碩龍鎮A村梁E氏によると、ラオトンは親戚ではない。それゆえラオトンが死んだら関係がなくなる。実の親戚ならば死んでも関係が続くという。

(42) 靖西県龍邦鎮Q村農C氏はジョンヘン県に父が紹介したラオトンがいるが、そのラオトンはアヘン中毒ゆえ3年間だけ付き合ったが、その後往来がないという。

(43) 大新県碩龍鎮A村梁E氏によると、息子は氏のラオトンを知っており、「阿叔」「バートン」と呼んでいる。しかし息子

同士は朋友ではない。見知っているが関係はそれほど密接ではないという。ハラン県ミンバン社B村ノン・ウアン・S氏によると、子供同士は顔を知っているが、付き合いはない。しかし、S氏の希望は、関係が孫の代にまで続くことである。ここにも願望と実態との乖離が見られる。

なお、自分の妻とラオトンの妻との関係について、靖西県龍邦鎮黄X氏の場合、ラオトンの妻は氏の妻を「ジエ」（姐）と呼んでおり、呼称上は妻同士も家族のようである。しかし、大新県碩龍鎮A村梁E氏の場合、ラオトンの妻と氏の妻は見知っているが、関係はそれほど密接ではない。また、チャリン県コーモイ社C村ロック・フォン・L氏によると、妻の父の命日にL氏のラオトンは「他の家族ゆえ来ることができない」という。これにより、ラオトンの妻の家族は別の家族なのであり、したがってラオトンが個人的な付き合いであることが一層明確となる。

なお、ジョンヘン県ダムトイ社L村リー・ウアン・B氏によると、子供がラオトンの子を好きならラオトンになれるというが、実際は子供の意向次第である。

また、前掲注33のように、黄X氏の父のラオトンは氏を養子にしようとした。この事例はラオトン同士の親密さを示しているが、実際に引き受けるかどうかは子の意向に任されている。

(44) 靖西県龍邦鎮Q村農C氏（2011年調査）によると、中越戦争の影響や出稼ぎで若者のラオトンは少なくなっている。Q村では戦争の影響により60、70代の者のみラオトンを持つという。戦争の影響は、チャリン県チーフォン社S村ダム・ウアン・Z氏（70歳、タイー族）も指摘しており、中越戦争によってラオトン関係は事実上消滅し、今は村人にはラオトン関係を持つ人はいない。戦争のために人間関係が変わったという。出稼ぎによる影響については、靖西県龍邦鎮J村阮C氏（72歳、男、2010年調査）も指摘している。

(45) 靖西県龍邦鎮黄X氏によると、若者はラオトンを好まず、普通の友人関係を好む。大新県D村方Y氏も、経済発展にともない、若者の間では出稼ぎや商売に従事する者が多く、ラオトンを持つ観念がない。若者もベトナム人と友人にはなるが、両者の密接さはラオトンを持っていた父の世代よりも薄いという。

(46) ホージー（ポンヨウ）については、前掲事例28、注32、および［塚田2010b］を参照。これらの他、大新県碩龍鎮A村梁E氏によると、氏にはホージーが7、8人いる。6、7歳から一緒に遊び付き合ってきた。ホージーそれぞれにベトナムにラオトンがおり、ホージーがベトナムのラオトンを訪ねるときに一緒に行く場合がある。しかし、ラオトン関係は、同じ村出身の地縁的な年齢集団のホージーに比べると個人的関係の側面が強いという。

(47) なお、女性にもラオトン（メイトン、ヤートンとも呼ぶ）を持つものが少なくない。

靖西県龍邦鎮黄X氏によると、夫人にベトナム人ラオトン（女）がおり、その家には女児5人、男児（未婚）1人がいる。氏は夫人とともに、その5人の婚礼に全て参加した。元来、氏が22歳の時、夫人のラオトンが夫人を氏に紹介し、結婚したという。夫人のラオトンは氏の家の婚礼・葬儀にも夫、子供ともども来る。「一家人と同じ」という。靖西県龍邦鎮Q村周M氏（66歳、女、2011年調査）によると、氏にはチャリン県にメイトン（66歳）がいた。20歳のとき靖西県壬庄郷の歌墟（2月11日）で知り合った。互いの呼称は「メイトン」で、相手は氏の父母を「バー」「メイ」と呼び、父母は相手を「ロックトン」と呼んだ。氏の姉・兄は相手をメイトン（妹同）と、妹・弟はジエトン（姐同）と呼んだ。氏はメイトンを持つ目的を、朋友同様、互いに助け合うためという。ただし前掲のQ村では、女性のラオトンは今はほとんどない（農C氏）といい、地域差があるようである。

(48) 壮族やヌン族・タイー族という民族のレベルを越えて、共通の言語を持つ集団としてのアイデンティティの形成の可能性については前稿で示唆をした［塚田2010a：110］。なお、そのことに関連して、ラオトン関係にある人がどの民族に属するのかについては、交易で頻繁に行って実情を理解している一部の人を除いては、中国側では「壮語を話す人」、ベトナム側では「ヌン語、タイ語を話す人」、すなわち同じ「講土」意識を持つが民族名は知らない場合が多いように見受けられる。この点についても前稿で指摘をした［塚田2010a：108-110］。

参考文献

黄漢英

1985　「壮族的做“同”習俗」『広西民族研究』1985年第1期、130頁。

伊藤正子

2003　『エスニシティ〈創生〉と国民国家ベトナム　中越国境地域タイー族・ヌン族の近代』三元社。

今村宣勝

2012　「多民族国家――54の民族」今井昭夫・岩井美佐紀編『現代ベトナムを知るための60章【第2版】』明石書店。

塚田誠之

2010a　「中国広西壮（チワン）族とベトナム・ヌン族との交流とイメージ」塚田誠之編『中国国境地域の移動と交流―近現代中国の南と北―』有志舎、84-116頁。

2010b　「壮（チワン）族の年齢集団に関する一考察」塚田誠之編『中国南北の国境地域における多民族のネットワーク構築と文化の動態』（平成19～21年度科学研究費補助金基盤研究（B）、課題番号19401046、研究成果報告書）、31-42頁。